

背くものゝ如し、是れ決して具眼者の取らざる所にして、苟も子孫の強健を慮る者、誰か其婦の牀格に注意せずして可あらんや。古昔和田小太郎義盛は豪傑を生まんど欲めて巴を娶り、果して朝比奈三郎義秀を得たり。然れども今日配遇者を選ぶ者、其牀格に注意するは至て稀あるが如し。畢竟未だ輿論の人種改良に心を傾けざるに由る歟。概えて軀強なる婦人の子は壯健あれども、孱弱なる者の子は壯大あらんと欲するも得て望むべからず。されば我國の輿論は強大なる婦人を尊重して、羸弱ある輩を擯斥する美風を養成し、以て國家萬年の長計を定めざるべからず。

何をか歴史といふ

講師 湯 原 元 一

乙、は人間の働作は、凡て内部の關係を有するが故に、隨ひて、交互に相影響し、尙天然の勢力にも、支配せらるるといへる觀念あり。この觀念も、古人には、未だ十分の發達をみせざりき。但し天然の勢力、例へば、氣候、地味、人種などの、人間の歴史上に及ぼす影響につきては、歐州古代の歴史家は、聊か注意せる跡あること、之を記録に徴すべし。されども、他の學術、技藝、宗教、道德、制度などの、國民の盛衰興亡に對する關係に至りては、只ツキヤデス、ポリプス、タチツス等のみ、僅かに其の一半を窺ひ知りたるが如くあり。ポリプスは、『羅馬の隆盛は、其の政体の宜きを得たるによる』と論し、タチツスは『國家の亡滅は道德の腐敗に基く』と説けり。かくの如く、當時の歴史家は、僅かよ政体道德の國民の運命と、多少の關係あることを知りたるも、他の宗教、學術、技藝のさくひよいたりては、尙全く之を度外に置きて、顧みることありき。降りて、中古の世となりては、人々、例の宗教熱に其の本心を失ひたせば、ポリプス、タチツスが抱きたる、僅かある見識の跡さへも、之を認むべからざる有様

とはあれり。支那の尙書は、儒者は、五經の隨一に數ゆれども、其の實は、陸復がいへる如くに、『記言之史』にて、歴史の中に入るべきものあり。この歴史は、何如ある主旨にて、撰ばしるは、孔叢子に、孔子の言を載せて、

子夏問書大義。子曰。吾於帝典。見堯舜之聖焉。於大禹。皐陶謨。益稷。見禹稷皐陶之忠勤功勳焉。於洛誥。見周公之德焉。故帝典。可觀美。大禹謨。禹貢。可觀事。皐陶謨。益稷。可觀政。洪範。可觀度。秦誓。可觀義。五誥。可觀仁。甫刑。可觀戒。遇斯七者。則書之大義舉矣。

とあるにて、其の主として、政治道德の關係に注目せることを見るべし。但し春秋は、専ら征伐會盟等、人君の動作を紀して、他に及ばざりしは、其の目的の主とする所、別に存したるによるべし。司馬遷が史記に、表書を附せし以來は、歴代の撰著、いづれも、其の例を襲きて、必ず制度文物のことに及ばせり。司馬光が、李延壽が志を作らざりてを惜みて、『使數代制度沿革。皆沒不見耳』といへるは、支那の歴史家が、敢て制度文物を忽にせざる意見の、一斑を窺ふべし。我邦の歴史家も、道德制度のこととは、中々に重んじ、中よも、道德の國家に對する關係の如きは、尤も心を用ひて、觀察せり。六國史中には、『尋常碎事。爲其米鹽』をぞいひ、一も文明的事變の記載を見ざるも、孝子、貞婦、忠僕をどの事蹟は、些々たる事までも、遺漏なく、摺撫せり。佛教渡來の後は、民間の私著中には、神佛混合の思想を以つて、一人、又は一二代の事蹟を記せるものあり。保元平治物語以下の演史類、又は荏柄縁起をどの縁起類を、其の種類中々に多し。されども、これらは、能く宗教と、國民の命運との關係を認めたりといはんより、寧ろ宗教を迷信し、迷信を基として、歴史上の事變を論斷せんと欲するが故に、恰も歐州

中古に於ける歴史家と一般、其の議論は、毫も見るに足るものなし。徳川氏に至りて、儒教の再興と共に、排佛論の氣焰、漸く盛に、月旦、全く其の標準を異にし、人物の相場、頓にくるへり。聖徳太子、北條泰時の徒退きて、平重盛、楠正成などの忠臣義士は、歴史上の大立て物となれり。終には、古代の歴史家が、佛教の教義を取捨せるさへ、痛く之を排撃するもの多し。東湖が、回天詩史に、

正統紀作。明國体。正名分。實爲神州龜鑑。而不_レ能_レ無_レ倂佛之累。嗚呼。卓識如_レ准后。猶尙如_レ此。邪說之惑_レ世。習俗之移_レ人。可_レ畏哉。

とあるは、其の一例なり。されば、大日本史には、外國傳を立てながら、佛徒の傳なく、近時水戸より、佛事志の追刊あるも、單獨に佛教の沿革を概説するにすぎず。獨り飯田忠彦が野史のみは、釋氏役氏の二傳を立つるも、これも、ろの卓絶せるもの二三を採録するまでにて、遺憾多し。要するに、我邦古來の歴史家は、道德、宗教、制度に注意せざりしは、あらざりしも、今日の如く、これら人間の諸動作を統べて、國家發達の跡を講究するさへ、へるまどには、尙未だ思ひ到らざりし。況て、其の外なる、百工技藝の事などは、僅かに好奇者の間に玩ばるゝまでにて、歴史家にして、かにかく、之に容喙するをば、却りて、其の面目を汚すことによふに思へり。

兩、は人間社會の事變は、斷へず相聯續して進行し、決して、其の間に、中斷さるものといへる觀念あり。此觀念は、前に擧げたる二箇の觀念と相關係し、前の二箇の觀念より、自から推論せらるゝものあれば、二箇の觀念の存せざる所に、此の觀念の、隨ひて欠けたるは、固より、當に然るべきことあり。前項にもいへる如くに、古代の希臘、羅馬の人は、統一的觀察をなす能はざりしが故に、箇々單獨の事變の、互に相關係することとを、洞看する能はざりし。中古の歐洲人は、統一的觀察をなしたるも、宗教

に偏倚したるが故に、普く尋常人生の事變までも、觀察すること能はざりき。佛の歴史家モノドはいへり、「中世の人は、人間社會に聯續する發達の存するといふことを、理會すること能はざりし」と。試みに、歐洲中古の歴史を披きて見よ、當時の歴史家に、如何ほど事變の聯續といへる觀念の乏しかりしは、其時代ちがひの事を、憚りもなく相混同せるにて、知らるべし。何事にあれ、政治法律に關する事柄は、一も、二もシヤールマン大帝の事業に加へたるが如き、又は獨乙帝國を以て、直に羅馬帝國の跡繼と見て、其の間に、時の上よりいふも、事變の上よりいふも、大なる懸隔の存することを、思はざりしが如きは、其の著しき、例なるべし。支那の歴史家にも、亦此觀念の乏しかりしは、其の史の体裁、編年紀傳を以て、満足せるにて推知すべし。司馬光が通鑑、朱熹が綱目は、偏覽の便をはかりて、著はざれしも、其の内部の体裁は、毫も傳來の範圍を脱すること能はざりき。趙甌北が二十二史劄記は、史論の体を兼ねて、事變の聯續に注目せるも、惜むらくは、普く制度、文物、宗教に論じ及ばず能はざりき。我邦古來の歴史は、六國史より、林氏の本朝通鑑に至るまで、専ら編年の体により、大日本史に至り、始めて紀傳の体を採りたるも、事實の聯續を見るは、箇人の事蹟の上に限るて、國家全局の變遷は、通觀するに由なき。青山延于が、本朝紀事本末は、其の目的、事變の聯續を明にするにあるも、其の分析の眼識なきが故に、觀察、皮相に止まりて、一條項の下に、千餘年に跨れる事實を牽合し、恰もエモンサイコロペヤを讀むの思あり。右ころ、紀事本末などいへど、其の實は、菅公の類聚國史の類あり。右の如く、東西ともに、近時に至るまでは、歴史家に、發達の歴史を生ずるに必要なる觀念、則ち人間の統一、其の働作の聯絡、其の事變の聯續につき、觀念を欠きたり。然るに、歐洲よありて、十五世紀以來は、新世界の發見、古文學の再興等のことあり、これら諸るくの影響にて、人間の眼界、頓に

廣く、隨ひて、其の思想も、一大革命に遭遇せり。此時代よりこのかたは、人々、自他數多の國民を比較觀察しては、其の一般、又は特別の性質を知り。古文學を講究しては、古今思想の沿革大なるを悟り。其の他、道德、宗教、法律、制度等につきても、さまざまなる比較講究をなせ、因りて、其の古今東西に於ける、顯象の異同を辨し。かくの如くして、始めて、前の三箇の必要觀念に、達するの端緒を啓き、爾來幾多の星霜と、苦辛とを経て、終よ今日の如き、發達の歴史の大成を見るに至れり。我邦に、此思想の傳來せざば、維新開國の後、間もなき時にあれども、其の初めは、後段にもいふ如く、ハツクル、スモツサー等の、極端なる意見によりて、媒介せられたるが故に、今日より見れば、其の弊も少からず。但し近時は、獨乙風の史學、一部の歴史家中に、唱道せらるるが故に、所謂發達の講究に關する意見も、稍や公正に歸するの望みあり。

茲に一言を添へて、誤解を防ぐべき。右の如く、發達の講究は、歴史の本領あることは、いふまでもなければども、此本領明なればとて、前の二体は、直に、其の跡を掃ふべしと信するは、誤りあり。前の二体は、各々、其の特有の長所と、必要あるが故に、其の發達の歴史に先ちて存したるが如く、又之と並行して、永く世間に行はるべきもあり。されば、今日とても、某の事蹟を、單に叙説するものあり、又其の事蹟の中より、偏に教育の材料に供すべきもののみを、採録するものもありて、發達の歴史と、並び行はれて、相悖らざるのみならず、互に長短相補ひて、益す歴史の功用を、世間に擴めつゝあるあり。

以上に述べたる所にて、歴史の意義の沿革は、其の大略を明にすへまと思へば、これより、歴史の定義につき、一言すへし。されども、何事にあれ、定義を下すといふことは、容易の事にあらず、別けて、歴史の如くに、其の關係する所の、極めて多き學科につき、遺漏なき、定義を下さんことは、おかくに

困難の業あり。支那の學者にも、歴史の意義を、一句の中に包括せんと試み、『史者。編也』又は、『史之爲言。使也』をせしへるもあれど、もとより、定義をせし稱すべきものにあらず。現今、歐洲數多の歴史家中にせし、歴史の定義は、既に一定したりとも聞へず、因りて、今は且らく、ヘルンハイムが、下しをける定義を假りて、聊之れが、説明をもあすしへし。ヘルンハイムが定義に、曰く、

歴史は、社會的のものとしての、働作に於ける、人間の發達に關する科學あり。
Die Geschichte ist eine Wissenschaft von der Entwicklung der Menschen in ihrer Betrachtung als sociale Wesen.

第一、社會的のものとは、社會を組織維持するに欠くべからざる、性質を有するものとの意なれば、既に社會的のものとししへは、其のものは、理性をも、自識をも有するものなるまとは、言はずして明かあり。ドロイセンは、『歴史は、道義的意志の發達を講究するものなり』といへりまが、これも、その意は、此の一語の範圍を出づるにあらず。尙此の一語の、歴史の定義に取りて、極めて、緊要なる所以を明にすべし。若し、試に此の一語を添へずとすれば、如何にぞ。歴史の定義は、或は廣きに過ぎ、或は狭きに過ぎて、共に誤解を生ずるの端を啓くべき。其の故、何んとせば、若し、此の一語を添へずして歴史は、人間の發達を講究するものとのみは、歴史は、彼の生物學の一部たる發生學と、混同せらるること免れざるべし。又若し、此の一語を添へずば、彼のフリーマンが、其の歴史講究法にいへるが如く、歴史を以て、單に政治の發達を講究するものとなすの、偏見をも生ずしへし。今日に於て、發生學と、歴史と混同するもの、これあるべしとは、思はざれどもフリーマン一流の偏見に安んずるものは、必ずしも、其の人をしとも、いひかたし。歴史の材料は、國家よ存し、國家と關係を有すること

は、疑ひもなき事あれども、何事にあれ、偏に、之れを、國家政治の方面より見たらんに、其の取捨、豈に能く公平あることを得んや。耶蘇教は、東西大陸に播布せる一大宗教あり。この宗教の發達を、某の一國家の政治上より、觀察にしたらんば、如何にぞや。耶蘇教の國家の政治と、關係を有するはいふまでもなきことあれども、該教は、又國家の政治と、關係を有せずして、目から獨立の發達をあたることぞ、知らざるべからず。其の國家の政治と、關係ある點に於てこそ、政治上の方面より、理會すべきも、そのこれと、關係なき點に於ては、此の方面の外に、他の方法を求めて、之を觀察すること、必要あり。其の他風俗、習慣、又は農商工等と如き、必ずしも、毎に國家の政治と、關係を有せざるものは、總て別に、政治の方面を離れて、獨立の觀察をなさざるべからず。然らずして、若し強ひて、これら總てを、一つの政治といへるものゝ下に、牽合せんと欲するときは、發達の眞面目は、終に隠れて、現はるゝの機あからん。然るに、今社會的のものといへる一語を加へをくときは、其の中には、政治上の事は勿論、文明的のことをも、包含するが故に、これら偏頗の講究に、陥ることを避け得らるべし。されば、セフレが、其の社會學に於て、歴史をば、『社會の科學』と名づけ、又ワッフレルが、其の歴史に於て、『歴史の本務は、人間の社會的狀態の成立と、成形とを既往の出來事によりて、説明するにあり』、といへるは、共に能く、歴史の本体を、洞看したる語あるべし。

第二、動作といへる中よは、彼の狀態といへるものをも、包含すると知るべし。教育、法律、農商工業の狀態の如きは、靜止えて、動作せざるが如きも、其の實は、幾箇なき動作の、集りあせる總額にて、其の根底に於ては、寸時も、靜止するものにはあらず。例へば、某の時代に於ける、農商工業の狀態といへば、其の外觀は、別に變化の認むべきものなきも、その狀態の存するは、農商工業の、絶へず營まれ

のゝあるに由るべければ、こゝをも分拆すれば、矢張り働作に外ならざること明かあり。若之然らずして、農商工業の働作、全く靜止したらんには、農商工業は、既よ存せず、隨ひて、いかにして、その状態と稱すべきものゝ、存すべき由あらんや。ドライセンが、歴史學に、歴史の講究は、順存に於ける、顯象にありて、並存は於ける、顯象にあらざるが如くに論ずるは、必ずしも、然りと云ふべからず。其の故は、右にいふ如く、歴史は、働作状態を并せて、講究すべきは、歴史は、某の時代を、順存、則ち縦に於て、觀察するのみならず、又之を並存、則ち横に於て、觀察するの必要あり。特に、文明的材料に屬すべきものは、多くは、顯赫なる働作の中に存せずして、却りて、隱微なる状態の中に存するものあれば、眞成ある歴史の講究法に於ては、決して、順存に偏して、並存を忽にすべからざるあり。

第三、發達の一語は、實に歴史をして、箇々單獨の智識に着目せる位置より進みて、箇々單獨の智識の聯絡に着目するの位置に進ましめぬ。歴史は、茲に至りて、散漫の智識にあらすして、一箇の聯絡せる完全の智識とされり。箇々單獨の事實も、固より、歴史の講究を要するは、論なきことされども、之を其の發達の關係に於てせず、箇々單獨のままにて、觀察するのことは、歴史の大成に取りては、直接の効益なきものとす。ワイツがコッファスの歴史を評して、「其の物語も、單獨の事實を、其のままに擧げて、之を一般趨勢の一証として、擧げざるが故に、尙偶然の性質を帶ぶ」と、非難せるは、他の發達の上には、注意せざる歴史家に取りても、項門の一針とやいふべし。

加之ならず、歴史が、他の科學と、其の性質を異とする點も、亦此一語に存す。蓋し、哲學は、全体を、博物學は、普通を、地理學は、特殊を講究するも、歴史は、此三者を并せて講究す。何んとなれば、歴史に於て、某の事蹟の發達を明にせんと欲すれば、先づ其の箇々單獨の事實を調査せざるべからず、是れ

歴史に於ける、特殊の講究あり。次に、此箇々單獨の事實を、一般の働機に基けて、説明せざるべからず、是れ歴史に於ける、普通の講究なり。而して終に、此箇々單獨の事實の關係を尋ねて、其の前後に上下し、其の全局を通觀せざるべからず、是れ歴史よ於ける、全体の講究あり。今一例を擧げて、重ねて、此意を暢言すべし。後醍醐天皇の御事蹟を説くに當りては、先づ御即位の事、御隱謀の事、御蒙塵の事、御崩御の事等の、單獨の事實を調査し、然後天皇の御性質を考へて、諸るくの御行蹟に、一貫の跡あることを明にし、終に前には、承久の亂に溯り、後には、明治の中興までも降りて、其の關係の全局を通觀するが如きは、則ちこそあり。但し所謂全体には、問題によりて、廣狹同しからず。萬國史に於ては、人間一般の發達を説き、國史、都府史、又は一個人の事蹟に於ては、國民、都府民、又は一個人の特別の發達を説くが如し。尙此二者の關係をいへば、萬國史が、國史、都府史以下を包含することとは、いふまでもなし、國史、都府史、以下が、萬國に切込むも、亦必要あり。其の故は、發達の上より見れば、事實の關係といふところ、重要な點をれば、其の關係の存する所は、自他の領分、如何を問ふに違あらざるなり。

昔し、支那にて、劉知幾といへる學者、或人の問に對へて、曰く、

史才。須_レ有_二三長_一。才也。學也。識也。夫有_レ學而無_レ才。猶_下良田百頃。黃金滿籬。而使_二愚者_一營_レ生。終不能_レ致_二於貨殖_一者矣。有_レ才而無_レ學。亦猶_下思兼_二匠石_一。巧若_二公輸_一。而家無_レ楨。稱斧斤。終不_レ果_二成_一其宮室_一者矣。尤須_レ好_二是正直_一。善惡必書。此則爲_二虎傳_一。翼_レ所向無_レ敵者矣。

といへり。この説は、久しく、世の歴史家の珍重せらるゝ丈よ、眞に名言あり。今之を、前の歴史は、全体、普通、特殊の三者を并せて、講究すといへる説に、對照するに、學は特殊の智識にて、才は、普通の

説明なるが如し。但之識は、全局の通觀をいふにや、劉の言にては、明白ならざれども、後人襲用の例にのきて考ふる時は、かゝる意も、存するが如くあり。

されども、右の如く、事實の關係を主として、發達を説くときは、往々、例の原因結果論の、餘弊を襲くことあり。これ尤も、戒めざるべからず。歴史に於て、事實の關係をいふときは、自から、原因結果の問題に渉るも、必しも、これを原因、かれを結果と、一々明確に論定するに及ばず、只其の關係を認めて、其の關係に隨ひて、事實を順序すれば、それにて、事足り。所謂原因結果論の主張する如くに、原因結果を極度まで推究して、終に最大の原因を求めて、他の總ての、歴史上の事實を、此の最大原因の發現として、説明するものとは異り。この點は、歴史が、歴史哲學と、其の性質を異にする所にて、頗ぶる、注意を要することゝ知るべし。

現在を理會するには、過去を明にせざるべからず、過去を理會するには、現在を明にせざるべからず。されば、この二者は、偏頗なき、講究を要すべきは、論なき。シルレルが史論に、過去を明にするは、獨り現在を理會するが爲めにするが如くに、いふは僻論あり。らゝる意見は、恰も數學を學ぶは、必ず計算測量等の必要に應ずるが、爲めなりといふに同じく、學問を以て、常に實地の應用に、供せんとするものにて、學問の獨立といふことを、知らざるものなり。教育上に於てこそ、歴史を授くるは、他の一大目的を達するの、方便にすぎざれば、其の本來の性質を曲ぐることも、固より、免れざることなれども、歴史を、一箇の學問として、講究するに當りて、かゝる意見に従ふは、然るべきことよめず。ラフケが、オクスが學問は、生活と離れず、現在の上に影響せざるべからずといへるに、反對して、『然し、影響するには、彼れは、先づ第一に、科學とせざるべからず。彼れ、若く先づ、現在を離れて、自由

客観的の科學に於て、其の位置を進むるときは、彼れは、始めて、眞成の影響を、現在の上に與ふるを得べし。と云へるは、愉快なり。

これにて、歴史の定義は、畧ぼ説きたれば、これより、歴史と、歴史哲學との關係につき、鄙見を述べべし。されども、これも、頗ぶる、廣大の問題なれば、茲には、特に一時、尤も我邦の歴史家ヲ歡迎せられたる、彼のバッツル一流の、文明史の根據の誤るる要點の之を指摘きて、一先づ、此篇の終局を告すべし。

我邦の歴史家が、舊來の陋見を脱して、發達的講究に傾けるは、バッツル、スペンサー等の著書、實に其の指南の役を執りたることは、前にもいへるが如し。今日でこそ、一部の學者は、其の淺薄を嘲けれども、今より十年前にありては、青年歴史家に、バッツルを崇拜せざるものは、殆んど稀なりき。豈にたゞ、十年前のミチランや、今日と雖も、歐風歴史家の多數は、尙其の快辯も、迷はざるものありとさく。バッツル、スペンサーが、我邦の歴史の進歩に與へたる功績は、宜しく、記憶すべき所なれども、其の説を妄信して、歴史講究の準繩を、彼れに取らんと欲するものは、今に於て、預め、之を警戒しなくては、必しも、無用のことには、あらざるべし。

バッツル一流の歴史家は、全くナチニライル、サイエンスにふれ、歴史を以て、殆んど、其の一部分の如くに、視做さんとするものあり。其の意見の基く所は、精神と天然とは、もと器械的に働作する天然方の、二つの異なる方面とありて、現はれたるものにて、其の根元に於ては、同一あり。科學の目的は、此二方を、同一する天然力の發現とて觀察し、其の發現につき、一定の形式、即ち一定の法則を求むるにあり。されば、歴史も、若し進みて、一箇の科學たらんと欲せば、亦其の領内に於ける、凡百の

事實をば、悉く一般の法則によりて、説明することを期せざるべからずといふにあり。要するに、此意見は、先づ預め、唯物論の主義を肯定して、毫も智識論の結果に頓着せざるものなれば、若し、唯物論を以て、争ふべからざるの真理とされる時代には、いざ知らず、然らずして、其の非難を蒙ること、今日の如き有様に於ては、此意見の根據も、まことに、頼みかひなきものにぞあるなり。抑も、所謂法則とは、如何あることを、意味するものなりや、是れ先づ、明にしをくの必要あり。ナチュラール、サイエンスに於ける法則とは、天然方の働きの、各箇の場合に、通有する根本的形式をいふなり。蓋し、ナチュラール、サイエンスは、種々の顯象を、其の箇々の單成分に分解し、其の根本に於て働作する、天然力の一定の形式に歸結するを以て、目的とするが故に、(例へば、生物學に於ては)、其の講究は主とする所は、異別のことにあらずして、共同のことなり。詳にいへば、其の講究の主とする所は、他に異なる性質を求むるにあらずして、他に同じき性質を求むるにあり。かく異別の點を捨て、其の共同の點を集めつゝ、漸次に、其の講究の歩を進むるときは、終には、總ての生活物、並に生活機能に、通有一貫する一大法則を發顯するに至るべき。されども、かく有機界はもちろん、他の無機界に於ても、一大法則の存するは、總ての有機物、無機物は、悉く其の根元よ於て、同一のものより成れるに由るべし。其の故は、若し、其の根元に於て、同一ならざるときは、總てのものに、通有一貫する法則の、存することとは、あて得べからざるの道理なればなり。故に、學者は、此根元に於て、同一あるものを假定して、原子と名けぬ。然るに、歴史を於て、講究する社會の根元は、同一の原子にあらずして、實に人間といへる、一種不可思議のものなり。此人間といへるものは、化學的分拆の結果にこそ、原子ともありて、あらはるも、其の生活機能は、單に原子の振動より、成るものにあらずして、意志の自由といへる、

高等なる精神的作用を具ふるものあり。隨ひて、其の動作は、縱横不羈にして、決して、一定枯燥の法則を以て、律すべからず。彼のバックル一流の歴史家も、此事情を知れるが故に、彼等は、先づ此意志の自由といへるものゝ存在を、拒まんと企て、さまざまに言を設けて、辨論せり。されども、今に於て、尙其の目的の幾分だも、達する能はざるは、固より其の所あらん。よし、之れが存在を拒み得たりとするも、他の思想、感覺等につき、能く一定の法則を設け得るに至るや、これも覺束なし。今の論理學に於ては、思想の形式をこそ説くも、其の内容は、知ることを得ず。況んや、思想より、幾倍となく、込入りたる感覺に於てをや、内容を知らざれば、感覺は、もちろん、思想の發現につきても、其の如何あるものゝ生ずべきやは、預め之を推言すること、思ひもよらず。かくの如く、心理學の問題に於ては、バックル一流の歴史家は、其の功を奏する能はざるが故に、彼等は、更に、統計學によりて、其の持説の根據を得んとせり。

統計學は、人間社會の運命を知るには、あかノーに必要な學科あることは、いふまでもなきことなれども、統計學は、もと事實の表現にして、其の説明にあらず、或る原因の存することを教ゆるも、其の原因の果して、何ものあるやを教ゆるものにあらざるなり。例へば、統計上に於て、物價と結婚とは、互に關係あることを認めたりとて、凡て物價の高下は、結婚の多少を制するの原因かりとは、必しも斷言し難し。其の故は、風俗、習慣、特に教育の異をれるに隨ひて、此二者の關係は、一概に論すべからざるあり。風俗、習慣、特に教育異なれば、人々の結婚せんと欲する決意のほども、いろいろに異をれる、結果を生ずべし。而して、此決意を、實に、結婚の多少を生ずる、眞成の原因なり。然るに、彼のバックル一流の歴史家は、抑もいかなる方法を以て、この無數の事情に基く決意をば、統計の上より

表はさんと欲するにや。此道理をも考へず、偏に物價の高下によりて、結婚の多少を説明せんと欲すれば、眞に物價の高下に制せられて、結婚の決意をなしたるものこそ、其の説明に満足すべきも、然らずまで、他の事情に逼まられて、此に至れるものは、其の迷惑を感ずること、少からざるべし。之を推して、統計學を歴史の上に濫用したる結果、如何を思へば、恐らくば、冥々の裏に、幾多の忠臣義士を、宛に泣かしむること多からん。且つ統計するものは、之を過去に施すべからず、たとひ、之を施すも、材料の欠乏せるより、極めて、不完全の結果を得るは、自から免れ難かるべき。若し、之を現在に限りたらんには、バグクル一流の歴史家は、常に現在の歴史の講究よ、とゞまらざるべからん。加之ならず、數を以て、表はすこと能はざるものは、右にいへる人間の決意のミぢならず、人間の感情の強弱、公其心、利己心等の厚薄、又は人間の勇怯勤惰の多少等、尙多々なり。而して、これらは、何れも、歴史の講究上よは、極めて、緊要の關係を有するものあり。固より、バグクルの如く、人間の道德宗教は、文明の進歩と、關係なきものと説かば、人間の感情の強弱等は、おとくして、注意するに及ばざれども、今日に於て、バグクルが、此説に左袒するものは、よも世間にあるべしとも思はざれば、以上のことは、矢張り歴史の講究上に、其の必要あるべし。

ドロイセンが、バグクル攻撃の論は、おかくに精し。今以上に説く所と、相發明するに足るべき、一節を譯出して、餘意の補ひとおすべし。予が尊敬する某思想家はいへり。若し、一箇人に屬する、總てのものを、Aを以て表すときは、此Aは、aと、xとよりあり、即ち、 $A = a + x$ なり。而して、aは該一箇人が、國土、人民、時世等、外圍の事情よりして、享有する總てのものを包括し、之に反えて、xは、自己の自由の意志によりて成就する、僅かのものを含蓄す。xは、aに對しては、殆んど、おきが如く

に小さなものなれども、いかに小さきに拘はらず、其の價格は、限りなく大なり。否や、道義的、人道的に觀察すれば、價格は、獨り彼に存するあり。ラファエールが用ひたりし、繪具、筆、綿布は、物質より成り、彼は、自から製造せざるべき。これらの道具を使用して、畫くといふことは、彼は、其の師匠より傳習せり。聖女、聖人、又は天使の想像は、彼は之を教會の傳説中より得たり。而して、某の寺院は、彼に相當の報酬を以て、揮毫を依頼せり。さてかく、依頼に應じて、傳説と、之より得たる想像とに基き、物質的道具と、技工的熟練とにありて、出來上りたるものは、前の方程式 $\Delta \parallel \epsilon + \times$ 中の、 ϵ が如くに ϵ の功業あり云々』と。この一條は、ドロイゼンが、バックルが、意志の自由を斥け、統計を過重するに對する、辯駁を知るべし。まことに、此説の如くバックルは、 $\Delta \parallel \epsilon + \times$ の方程式中に於て、偏に ϵ のみを見て、他に其の價格の、最も重大なる \times の存することを、忘却せり。

かくの如く、心理學上よりも、又統計學上よりも、バックル一流の歴史家が、期待するが如き、歴史上の法則なるものは、發顯するに由なきものなれば、歴史は、前より ϵ が如く、歴史の本領を守りて、其の發達の講究を以て、満足することゝ必要あり。假令、歴史に於て、一定の法則を、發顯すること能はざればとて、之を以て、直に、歴史は、科學にあらずと思ふは、大なる誤りあり。其の故、何んぞあるは、學科の性質、異なるに隨ひ、其の本領とする所のこと、自から同じからず、而して、歴史は、未だナチニテール、サイエンスの一部分となせたるに、あらざればなり。若し、歴史の本領、ナチニテール、サイエンスの如くならざるが故に、科學にあらざらずといふことを得ば同じく、ナチニテールサイエンスの本領、歴史の如くならざるが故に、科學にあらざらずといふことを得べし。ドロイゼンが、バックルの方法を評して、手を以て嗅ぎ、足を以て消化し、色を聴き、音を視るよ比せしは、罵り得て痛快なり。最後

よ、所謂歴史上の法則なるものを、求めんと欲するものが、如何ほど、極端ある試みをあすや、一例を擧げて、其の流弊の極まる所、殆んど笑ふべきに至るの証を示すべし。エルンスト、サッセが書に、『精神奮興の徴候としての、生活、戦争、疫癘、時疫等に於ける、種々ある有機的無機的の働きの興隆は、太陽の定期の膨脹と共に變化する、引力の關係に基くものなり』との説を載するは、往昔陰陽師なるものが、天象を占ふて、國家人事の吉凶禍福を判断せることを思ひ出されて、眞に抱腹の至りなり。因りて惟ふに、太鏡よ、花山院遜位のことを、陰陽博士の安倍晴明が、天變によりて知れるさまを、まことぢやかに書きしるしあり。若し右の説にして眞ならんには、晴明どころ、さすがに、後世に聞へたる陰陽家だけに、殆んど、千年の前に近き時に於て、早くも、所謂歴史上の法則あるものを識れりやいふべからん。

(完結)

思想傳達法に就て

川田 鐵 彌

琵琶の水は深く、芙蓉の山は高し、此山水明媚の土は上古より言靈のささこふ國として自ら誇りたる國柄あり。然れども人々相互に思想を交換し、事物の理を究むるは其天性にして、恰も生れながらにして犬の吠え、車の鳴くと一般ありと云はゞ、風の口さきも其迂を笑はんとす。蓋し吾人類は最初野蠻蒙昧にして、冬は土窟に蟄し、夏は樹下に棲み、草根を食とし、獸皮を衣となせる姿にて、禽獸の如き言語を有せざりしかれど、日月の經過すると共に、今日の如き文物粲然たる開明の域に達せし者

亦あり。論より証據、現今にても赤道直下亞弗利加土人、北米ヒクトリヤ土人、其他野蠻人は其赤兒を屠殺し